

## あんじゅのかげみ

黒板を背にしたぼくから向かって直ぐ左手前が安住の席だ。彼がいま、たっぴりと墨汁を含ませた筆を紙の上で泳がせている。工作台の上に置かれた画用紙には描きかけの風景のような図。構図は横位置、下辺は草むらだろうか。のこぎり状のぎざぎざが描かれている。ついさっきまで、そのぎざぎざを右端から順番に左に向かって塗っていた。それから、画面なかほどのぎざぎざ部分からぬっと垂直に上方に向かって樹を描いた。左右に枝を延ばす。枝ぶりは黒い稲妻のようだ。樹の幹はまだ塗り残しの部分があるが、葉の繁みは、墨汁の黒と葉の隙間の透けたところを塗り残した紙の白が面白いコントラストをみせて、ほぼ仕上がっている。ぼくは彼が幹の途中部分から始めるなどと思っていたら、いきなり幹の根本部分、草むらの陰から獣の頭を描きだした。顔は猫のようにも狼のようにも見える。

すると突然「終わり！」と声をあげて、筆を仕舞って帰ってしまった。読めないなど思った。彼は下絵やエスキースをせずに、かなり複雑な図柄も墨一色で直接描いていった。筆の扱いがけっこう乱暴で、そのため傷みも早かった。しかし、ささくれてぐずぐずになった穂先で、細かい部分や際や形を恐ろしいほどの精度と速度で描くことが出来た。ひとの筆使いは見ていて飽きない。そのひとの身体の運びや氣息がそのまま筆に乗り、自分との違いを見せつけられるからだ。ただ安住のそれは少し違っていた。そう描くか！そこから塗る？の連続で、決してアクロバティックな筆さばきではないのだが、とてもアスレチックな描き方をしていた。断崖の上できりぎり舞いしながらもこの線だけは引いておく、この形だけは塗っておく。そして落ちてゆく。また次の断崖で足を滑らせながらも、慎重に線を引き点を打ち、落ちてゆく。

そういうふうには三嶋安住は、猫の髭を描いたり鳥の羽ばたきを描いていた。彼は当時、美学校のドローイングゼミに通って来ていた生徒で、ぼくはその講師だった。彼は十八歳から二年間このゼミに通った。週に一度の教室でぼくは彼の描きを毎回はらはらしながら、でも何食わぬ風をよそおって見ていた。ひとの話し声に敏感で、生徒同士の無駄話によく腹を立て「うるさい！」と怒鳴ることもあった。ぼくの記憶は全然あてにならないくせに、つい目の前のことのように書いてしまったが、当時、毎週教室で彼が絵

を描くのを眺めていて、彼の絵の描き方に内心翻弄されていたのは事実だ。絵は自由に描くもので決まった描き方はない、ぼくはそう思い込んでいたはずなのに、彼の描き方を見ていたら、本当に自分はそんなことを思っていたのか怪しくなった。

漢字に“書き順”というのがある。日本の学校ではそこをウルサク言われる。ぼくの書き順はとても怪しくて、漢字の書き取り練習では、先生からよく赤字で直されたものだ。でも、外国の人（漢字圏の国の人は除く）に漢字を書かせると素晴らしい文字を書く。また文字を習いたての子供も素晴らしい字を書く。彼らは、身惚れてしまうような嘘字を書く。また、海外で日本人観光客にアピールしているのか、街の中の看板などでお目にかかる“なんちゃって漢字”も素敵だ。表記された文字がぎりぎり判読できる程度で横棒が足りなかったり点の数が多かったり、偏やしんにゆうの形が微妙に違うと、読まずに見てしまう。そしてニヤリとさせられる。ぼくらは漢字を意味と字体を重ねて記憶しているので（これはまったく教育のおかげなのだが……）それから外れる“似たもの”に対して、ぼくらの経験と理解が脱臼させられてしまうのだ。漢字はもともと表意文字であり、あらゆる形象を現在のような形になるまで記号化し整えてきた結果完成した文字なので、抽象度も完成度も素晴らしく高いのだが、それ故にどこかたった一ヶ所の誤りによって全体の印象を変えてしまうのだ。それは同時に、ぼくらの視覚的認識と経験に裏打ちされた頑丈な文字の歴史の一端がほころびる瞬間でもある。新しいカタチが出現してそれに目が奪われるのだ。経験も認識も及ばない「剥き出しのカタチ」にヤラれてしまうからだ。

話はまた脱線してしまうが、電車に乗っているときに向かいのシートに座っているひとの顔に唸ることがある。ひとの顔はどれひとつとして同じものはないけれど、あ、こんな顔もあるのか、と驚くことがある。それはとりわけすごい形相だったり珍しい顔をしているわけではない。むしろどこにでもいそうで、たとえばとてもアジア人的であり、とてもアングロサクソンの的であり、とてもアフリカンなのに、ごく見慣れた“ひとの顔”の印象が、誰とも似つかず何かが違うのだ。ひとの顔のイメージから少し逸れている、といえばよいか。それは、ひとの顔がまったくどうあっても顔足るべくして顔になるためのどこかの造作の一部が、顔面のなかでさりげなく梃入れされたことで、あくまでも

自然に速やかに全体に波及して“此のひと”の顔がたちまちにして仕上がった！という、そんな顔に出遭った感じ。そしてそのたびに、こういう顔あるよな、あっていいよな、と妙に納得するのだ。「見慣れた初顔」というのだろうか。オリジナルとか差異をありがたがるよりも、電車の中でそんな顔に出遭えたほうが断然僥倖というものだ。ぼくらの住み暮す意味的世界にすっかり同化しつつおスツとそこからすりぬけて何気なく自分の隣や目の前に現れて、ぼくらの世界の限りと果てを思い知らせてくれること。

顔のことを書いたついでに、もう一例。かつてアメリカに一人の画家がいた。生まれは西アジアのアルメニア。十六歳で妹と共にアメリカに移民として移り住む。彼はその地で画家を志し、アルメニア名のヴォスタニック・マヌーク・アディオアンを捨てアーシル・ゴーキーと名乗る (Arshile Gorky, 1904 - 1948)。短い生涯を自ら閉じる悲運の画家ではあったが、遺した作品とドローイングの数はおびただしい。シュルリアリストともアメリカ抽象表現主義の先駆者とも言われたが、ゴーキーは終生、アルメニアのひとや風景や子供の遊び道具を、線や形、色彩に変容再出させ、他の画家の誰かの作風に紛らせ偽装して、人間本来のイメージの錯綜と情緒の混乱を自然の景色として、丸ごとキャンバスに着地させようと試みた。その彼の絵に《芸術家と母親》というのがある。ゴーキーが幼い頃に撮られた母親と並ぶ写真を元に描いた絵だ。アングルに学び描き始めた当初から、ビザンチンアイコンや様々なイメージを経由しておよそ十年の月日を費やして辿り着いた肖像画だ (The Artist and His Mother, 1926 - 1936)。母と子は、わずかに眼窩を翳らせ魚のような目でこちらを見ている。ぼくは初めてこの絵を画集で見たとき、てっきりピカソの絵だと思った。母子の顔がピカソの新古典主義の時代の特徴そのものであったから。影響や模倣というにはあまりにもあられもないほどの似姿だ。ちょっとあきれて驚いた。でも同時に確信したのだ。ピカソを強くイメージさせるけれど、真似じゃない。これはあきらかにゴーキーそのものだ！このとき、なぜぼくはそう確信したのだろうか。彼の作品は常に誰かのイメージを彷彿とさせる。セザンヌ、ブラック、マチス、カンディンスキー、カルダー、ミロ……。でも、どれもこれもいつもゴーキー。アーシル・ゴーキーという決定的な徴。他者をインプリントすることを拒み、シールやラベルの如く他人を私に映し込むこと。貼ったり剥がしたり、ほとんど遊戯に近い。でも、最も危険な遊戯だ。こんな遊びをどこで憶えた？ ゴーキーもかなりアスレチックな男だ。

ここまでぼくが長々書いてきたのは、そのどれもが“安住的”だと思っているからなのだ。だが、どうにも肝心の安住に突き当たらず途方に暮れている。なかなか彼には触れられない。しかし、彼と彼の描く絵はいつもぼくにしっかり触れてくる。身体を揺すられたり撫でられたりもする。その瞬間はぼくが彼に触れていると言えなくもないが、そんな哲学的解釈では物足りないし、やはり一方的にぼくの何かが足りないのだな、仕方ないかとアキラメている。

それはさておき、安住の絵は誰とも似ていないけれど、それが彼のオリジナリティや良さを保証するものではない。彼は、自然のエレメントを絵のモチーフにしている。海、山、星、月、植物、鉱物、動物のどれもがごく見慣れた親しみのあるモチーフでありイメージだ。風景というより光景に近い。安住が、“ここ、そこ、あれ、これ、を見た”と報告しているように見える。《夜と彗星》《海の夜明け》と題された二点の作品がある。どちらも雲肌麻紙に水彩で描かれている。《夜と彗星》は長く尾を引いて星が落下する絵だ。背景が三層に塗られていてそれぞれの青がとてもきれいだ。彼がその絵に言葉を寄せている。「深く夜が静かな世界で 夜中を訪問者来る彗星です」《海の夜明け》は画面水平にウルトラマリンとターコイズブルーの二色で色分けされ、沖から画面左端に二振りのストロークが延びている。これにも彼の言葉がある。「夜明け海の中明るくなった優しい気持ちなりました」こちらの文章はとところどころ書き損じたのか何ヶ所も消した跡がある。この原稿を書いているパソコンで安住の言葉を打つと、その言葉の下に何ヶ所もタイプミスを示す波線が出てしまう。ぼくは、これは絵の説明などではなく、ぼくに書き記してくれた「言葉」だと思うのだ。絵の隣に馴染むことももたれかかることもなく並び立つ、もうひとつのイメージだ。こんなことがあった。HIGURE 17-15 cas でゼミ展を開くことになり、展覧会のタイトルを考えてくるように生徒たちに言った。翌週、教室に行くと皆の様子が神妙でいつもと違う。安住君が考えてきたタイトルです、と言って渡された紙を見ると、墨で「愛の過現未」と書いてある。「アイノカゲンミ？」と読むと彼はすかさず「かげみ。あいのかげみ」と訂正した。耳慣れない言葉と響きだった。「過現未」とは仏教用語で過去現在未来の三世を意味するようで、“かげんみ”が本来の言い方だそう。愛の過去現在未来、永遠の愛……おお！てなことは、このときぼくらの誰一人も考えなかった。ぼくらは、「ア・イ・ノ・カ・ゲ・ミ」と発音してただその

音にシビレ、身体がふるえたのだ。安住はたった一字を脱字して、意味の代わりにぼくらに未知なる言葉を聴かせ景色を展いてくれた。

安住の絵と言葉と声と仕草、そして彼のしじまにぎわい。それらをぼくらのなかに見つけるとどれも少し気にかかる。そこでどれか気になることの方へ降りてゆくと、そこに安住はいない。代わりに自分がいた。いや、よく見ると自分とそっくりな顔をした違う自分がいた。これもおれか！と気づいたらただちにそいつをつかまえて入れ替わることがよいだろう。もともとどれも自分なら、そこに還るだけのことだ。さあ、もう静かにして三嶋安住に、絵を描かせろ。

O JUN  
2014年7月

初出 三嶋安住『青い水晶』BOOK PEAK, 2014年